

Kyle D. Kauffman and David L. Lindauer eds.,

AIDS and South Africa: The Social Expression of a Pandemic

New York: Palgrave Macmillan, 2004.

xix + 195 pp.

まきのくみこ
牧野久美子

なぜ南アフリカはHIV感染者が集中する、世界の「エイズの首都」になってしまったのか。エイズは南アフリカに、どれほどのコストをもたらしているのか。この状況にどう対処していけばよいのか。本書は、このような問いを念頭に、南アフリカのエイズをとりまく状況を、経済、政治、歴史、文化など、様々な面から総合的に検討している。

本書は2002年4月に米国で開催された国際会議をベースとしており、サクセス夫妻による「生きていくには貧しすぎる」(Too Poor to Stay Alive)と題する印象深い基調講演が第1章に収められている。ジェフリー・サクスは、2000~01年にWHOの「マクロ経済と保健」委員会の委員長として、途上国のHIV/AIDS対策への国際的な資金投入を呼びかけていた。本章では、妻で小児科医のソニア・エーリッヒ・サクスとアフリカ諸国を訪問した経験をもとに、アフリカで多くの人々が死んでいるのは、端的に貧しすぎるからであるとし、豊かな国の人々は貧しい国に資金援助する必要があると訴えている。

第2章は、なぜ南アフリカにHIV感染が集中しているのかという本書の中心的な問いに、「制度」に着目することによって答えようとしている。制度には、法律のようなフォーマルなものだけでなく、割礼の習慣、女性の地位に関わる社会的規範などのインフォーマルなものも含まれる。

第3章は、「未曾有の」という形容詞がついてまわりがちなエイズをとりまく状況が、伝播経路や社会の反応などの点で、かつての梅毒、天然痘、スペイン風邪の流行と類似点が多いことを示している。

第4章は、2003年4月までの南アフリカにおける

エイズをめぐる政治をつぶさに追い、なぜ南アフリカのエイズ政策は失敗したのかを検討している。白人政権時代にアフリカ人の間でエイズが「我々からセックスを奪うためのアフリカーナーの策略」(Afrikaner Intervention to Deprive us of Sex)の略語と揶揄されていたことなどを取り上げ、ムベキ大統領のコントロールバーシャルなエイズ言説(エイズの発症メカニズムや治療法についての主流派医学の見解を否定するなど)の背景を探っている。

第5章は、エイズが南アフリカにもたらす人口学的、経済的なインパクトについての試算を紹介している。経済的インパクトについては、企業、家計、政府、経済全体の各レベルを取り上げている。

第6章は、南アフリカとボツワナの11名のアーティストがエイズをテーマとする作品を競作した「アーティスト・フォー・エイズ」の取組みを、それぞれの作品の写真入りで紹介している。

第7章は、HIV感染防止に有効なコンドームの使用が進まない理由を、入手と性行動の面から考察している。入手に関わる要因としては、クリニック等でコンドームは無料配布されているものの、プライバシーが守られないとの心配から、未婚の若者は入手しづらく感じていることが示されている。また、性行動に関しては、「コンドーム使用」と「信頼の欠如、浮気」とが結びつけて考えられ、浮気相手(spares)とはコンドームを使用するが、本命(originals)とは使用しないというパターンが広く見られることが指摘されている。

第8章は高等教育機関のエイズへの取組みが軒並み遅れるなか、ケープタウン大学がどのような啓発・研究活動を行っているかを紹介している。第9章は、会議全体の総括である。

会議のプロシーディングスに近い性格の本であることもあり、各章のトーンや論文としての質は様々で(そもそも「論文」として書かれていない章もいくつもある)、全体としてのまとまりは欠く。しかし、個別には読み応えのある章もあるし(とくに第3章と第7章。突出して長い第4章は情報量が多いがやや散漫である)、南アフリカのエイズをとりまく状況をこれほど多様な面から、かつコンパクトにまとめた本は他にないという意味で、貴重な本である。

(アジア経済研究所地域研究センター)